

にれのき

<http://elm.m78.com/>



**November
2007**

小学生自転車プロジェクト全員完走秘話

「一生忘れない思い出とエルムの仲間とのキズナが生まれた」

「全員完走をめざす」

「悔いのないよう全力を尽くす」

「楽しんで走る」

「そのために、『遅い』という言葉

葉は言わない。いちばん苦しい

人に合わせて声を掛け合って励

まし合って、がんばっていく」

これらの目標を胸に、10人の

6年生たちは奥多摩を目指し、

8月23日午前4時30分、荏原教

室を出発しました。

1ヶ月半前、7月1日の特カ

リ後の6年生話し合い。

「うわあ！やった！」

今年のキャンプの6年生企画

は、話し合いの結果、多くの6

年生たちがずっと憧れ続けてき

た奥多摩まで自転車で行く「自

転車プロジェクト」に決まりま

した。

話し合いが終わった後、盛り

上がる子どもたちのなかで、この企画に対して心のなかに不安を抱えている子どもも何人かいました。そのうちの一人が葉瑠華でした。

「自分は運動が苦手だし、体力もない。そんな自分がいることで、みんなに迷惑をかけちゃうんじゃないか」

しかし、そんな不安をみんなにはまだ正直に伝えられない葉瑠華。

葉瑠華たちの不安を軽くし、その不安を仲間たちみんなのものにすることにしました。そこで、まずは自転車プロジェクトに不安を抱えていた3人と、本番コースの一部試走をおこないました。試走は成功し、何とかいけるといふ確信を得ることができました。ところが、当の子どもたちの心のなかにはまだ不

安が残っています。試走後の3人の話し合いでは、一人ひとりが自分の不安について話をしてくれました。

「体力がないから、みんなに迷惑かけちゃうか心配なんだ」

「待たせちゃったら悪いし、遅いって言われちゃうのが嫌」

そして、葉瑠華も初めて自分の気持ちを言いました。

「待たせちゃったら、みんながどう思うか気になるんだ」

3人とも自分が完走できるかという不安よりも、仲間から自分がどう思われてしまうかという同じ不安を持っていたことが分かりました。自分だけではなくて同じ気持ちをもった友だちがいたんだという安心感が、葉瑠華や他の子の顔にあらわれ

ました。その後、日をあらためて6年



生全員による話し合いをおこな
いました。勇気をふりしぼって
自分たちの不安を話した3人。
3人とも仲間たちがどんな反応
をするのかとドキドキしていま
す。

『遅い』なんて言わない』
『協力するよ』

『声を掛け合っていこう』

みんな口々にあたたかい言葉
を返してくれました。そして、
自転車プロジェクトのみんなの
目標（冒頭紹介）を話し合っ
て決めました。

特に子どもたちがこだわった
のは、「全員で完走したい」「楽
しく走りたい」という目標です。

小学部では仲間と自分への信
頼を育てるため、さまざまな場
面で話し合いをおこなってきま
した。特に今年の6年生はそれ
ぞれの学校で起こったことにつ
いても、包み隠さずみんなで話
し合い、共有してきました。で
すから、葉瑠華たちが気持ちを
語り、それにみんなが共感して
目標をたてられたのは、子ども
たちの中に仲間への優しいまな
ざしがあったからです。

「私の気持ちをみんなにわかっ

てもらえて、本当にうれしな
った」

葉瑠華の言葉とはにかんだ笑
顔がとても印象的でした。

雨にも負けず、夏の暑さにも
負けず、子どもたちは約13時間、
力いっぱいペダルをこぎ続けま
した。そして、午後5時15分、
奥多摩駅に到着。全員完走。

「坂道がきつくてすぐく疲れた。
でも完走できてよかった」

「達成感があつたし、すつごく
気持ちよかった」

「みんなで奥多摩にゴールでき
て本当によかった」

歓声をあげ、お互いを称え合
う子どもたち。大きな挑戦を終
えた子どもたちの顔は、爽快感
と充実感いっぱい。素敵な笑顔
にあふれていました。そして、
ともに頑張りぬいた仲間への信
頼の力と絆は、より強く確かな
ものになりました。



夏休みの課題は毎日30回のスクワットで体力づくり。しかし、最後の山道ではヘトヘトになりました。

みんながいたから本気になれたわたし 坂井 葉瑠華 (小6)

今年のキャンプのスタートは6年生自転車企画だった。私は最初、不安だった。私はまず運動が苦手だし体力もない。だから、みんなより、おくれちゃうんじゃないかとか「おそいよー」とか言われたらどうしようとか、途中でリタイアとかはしたくないなと、ちょっとネガティブ思考をしていた。でも、不安のある萌々とみずほと試しに二子玉川まで走ってみて、その後3人で話し合ったら、萌々とみずほも遅いとか言われたら嫌だなと思っていた。こういう気持ちは自分だけだと思っていた。私と同じ気持ちの人がいたんだなと思い、自分だけじゃないんだと安心した。

また、その後、6年生全員が集まって話し合いをした。私たち3人は不安なことをみんなに言った。「え〜」と思われるかも、と言う前はすごく不安だった。だけど、みんなが理解してくれて、ちょっと不安がうすれた。いっしょに自転車で行く仲間だもんね。言ってよかった。みんなが理解してくれたから、本番までに不安は小さくなっていった。

そしていよいよ本番！この時には、「みんなと一緒にがんばろう」という気持ちが強かった。走り始めた

ら風が気持ちよかった。でも雨が降ってきたり、事件(?)がいろいろあった。そしてみんなで完走したときは本当によかった!!うれしい!!と思った。と同時に、疲れがドッとおしよせてきた。その日の後のことはあんまり覚えてない……。けど自転車企画をやって本当によかった。やる前はいろいろ不安を感じていたけど、自転車企画をやって、あまり一生懸命になったことのない自分も本気でできて、ちょっと自分に自信がついた。それとみんなでがんばれてよかった。みんなともっと仲良くなれた気がする。とにかく6年自転車企画は、最高の思い出になった。



詩の授業 「教室はまちがひつゝまじるだ」

合宿で教えたこと

上の詩は「エルムとはどういう場所なのか……」夏合宿国語授業で、中学1年生が書いた詩です。ここにはエルムへの想いが凝縮されています。

エルムの夏合宿での授業は、各教科ともいわゆる教科書的な「学習」を離れて、日頃子どもたちにどうしても学んでほしいと思っている「学び」を創っていきます。

中学1年生の国語は05年以降毎年合宿初日に、詩「教室はまちがひつゝまじるだ」(作：蒔田晋治)を教材に使い、自分の想いを語り、詩をつくる授業を展開します。この詩は、小・中学校でも授業開きでよく取り上げられる有名な教材です。エルム中学部で今後3年間、しっかりと仲間

を率直に言えることができる、その第一歩にしたいというのがこの教材を使う狙いです。

まずはリラックス

こころと身体をひらく

中学1年生は合宿初参加、しかも初日、期待感の一方で緊張感も大きくなっています。まして「間違いを恐れず」という価値観と対峙するには、その前に緊張感を解きほぐし、気持ちを開放させてあげることが大切です。そのため、まずはさまざまな集団ゲームをおこない、心を柔らかくしていきます。

柔らかくなったところを見計らって、次は大広間に大の字に寝転び、天井を見上げながら、できる限りの大きい声で自分の想いを声にして叫びます。大きな声を腹の底から出す機会はありませんから、最初なかなか大きな声は出せません。

教員は腹式呼吸を使い、大広間全体に響き渡る声を張り上げて、子どもたちの度肝を抜くようにします。すると、子どもたちはそれに見習い、大きな声を腹の底から響かせるようになっていきます。

「エルム最高」

「勉強なんてくそくらえ」

という声が次第に大広間に響き合います。大きな声を出すことで、子どもたちの身体がさらに開かれていきます。

詩の世界へ

そうして、いよいよ詩の世界に入っていきます。そのままの寝転んだ体制で「教室はまちがひつゝまじるだ」を、教員が先程のような声の大ききで感情を込めて朗読します。子どもたちは大の字になったままその朗読を

こわがりだったわたしにも幸せがあった
エルムという新しい世界
新しい友達
新しいうれしさ
それがわたしをかえた
エルムがわたしをすくった
わたしはエルムが大好き
エルムは最高のところだ
わたしはいじめられている子を救いたい
役に立ちたい
それがわたしを成長させる
弱虫な自分は、もう嫌だ
弱いからなんだ
小さいからなんだ
これからはどんなことでも乗り越えられる

(07年度中学部1年女子)

エルムは胸をはるところだ

学校では何もいえない子

学校では成長をしない子

学校でいじめられている子

こんな子たちでも胸をはれる

これから消えてしまう光

生まれる光

そんな光のために胸をはる

そののながおかし

なながへんだ

そして飛んでいく

つめたいところ

うるさいところ

自分勝手なところ

そんなところに平和をもたらす

美しさをもたらす

いろいろなものをもたらす

へたすりや学校の価値もかえるかも？

へたすりや自分をかえる

ものの方をかえられる

ぼくをかえたのは

ともだちである

教員である

(07年度中学部1年男子)

詩「教室はまちがうところだ」 蒔田 晋治

教室はまちがうところだ みんなどしどし手を上げて
まちがった意見を 言おうじゃないか
まちがった答えを 言おうじゃないか
まちがったことをおそれちゃいけない
まちがったものをワラっちゃいけない
まちがった意見を まちがった答えを
ああじゃないか こうじゃないかと
みんなで出しあい 言いあうなかでだ
ほんとのものを見つけていくのだ
そうしてみんなで伸びていくのだ
(中略)
そんな教室作ろうやあ

聴きます。朗読が終わると、詩の中の自分がいちばん好きなフレーズを、先程と同じように天井に向かって大きな声で読み上げます。こころと身体が開放され、気持ちよく朗読ができるようになりまます。朗読後、車座に座り直し、みんなで感想を語り合います。

「いい詩だね」
「自分の気持ちにぴったりだ」
「間違ったら笑われたことがあつて嫌だった」
「学校では自分の本音は言えない」

そして仲間の感想を聞いて、それに対する感想や意見も自由に出し合います。

「君と同じ体験をした」
「学校では差別する奴がいる。俺の学校でもそういう感じだ」

教員も質問したり話に入りながら、今までに自分が「まちがう」ということで人から笑われたり恥ずかしい思いをした体験が、一人ひとりから語られ、みんなで共有されます。

詩の中味を自分と重ね合わせて

さまざまな意見を自由に出し合うことは、実は子どもたちにとつてとても重要なことです。自分の意見を否定されない、バカにされない、きちんと聴いて受け止めてくれる。このような場面が学校では残念ながら少ないのが実情です。「エルムでは、授業中を含めて一人ひとりの意見を大切にしてくる。」「仲間が共感してくれる。」「そういう経験によって、子どもたちの心に安心感と仲

間への信頼感を培うことをしています。

そのうえで、詩の内容をもう一度考えながら、「まちがってもいいんだ」「自信を持つて自分の意見を言おう」ということを確かめ合います。

仲間との共有は 自信につながる

その後、「教室はまちがうところだ」を「エルムは〇〇するところだ」という言葉に置き換えさせ、詩を作り、そして発表し合います。

毎年できあがった詩は合宿のニュース「終りなき旅」に掲載され、読まれます。中学1年生の仲間だけでなく、合宿に参加している中・高校生のエルムの仲間たちとエルムへの想いを共有することが出来ます。自分の想いや意見をさらに多くの仲間が認めてくれるのです。ちよっぴり恥ずかしいけれど、先輩たちからもらうあたたかい共感の拍手は、中学1年生たちに大切な自信と信頼を育てていきます。

親禁制の夏合宿に参加して

坂井 遊美子さん（中2長女と共に合宿に初参加。小6次女は夏キャンプに参加）

思春期の子どもを特性を考えて、これまで親禁制となっていたエルム夏合宿。そこに今年初めて参加した親の目には合宿はどう映ったのか……？



娘、明日香とエルム

私の娘、明日香（現中学2年生）は知的障害があり、身障学級（現特別支援学級）に通っていた。そのころ、小池智勢子先生にエルムを誘っていただいた。明日香は小学校2年生、妹の葉瑠華は保育園年長だった。明日香はまだ小さく、小池先生のひざの上で「あいうえお」を教えていただいていたのが印象に残っている。

キャンプにも誘っていただいた。「キャンプは4年生から参加だけど、今からお母さんと一緒に参加して雰囲気慣れ、4年生のときひとりで参加できる」といいねと。

その初めてのキャンプのとき、川遊びに行く道すがら、小池先生は、体調が良くないと話された。私は大いに心配したが、体調が悪いのかかわらず、冷たい川に入り、子どもたちの前では、つらい顔一つ見せず、むしろ楽しそうにしていた姿は忘れられない。小池先生とご一緒した最初で最後のキャンプだった。

明日香も合宿へ

小学生のキャンプは、6年生で親なし参加の目標が達成できた。中学生になり、夏休みの過ごし方を相談した。矢沢先生から、合宿の一部参加なら可能ではないかと言われたが、そのときは行かなかった。合宿DVDを見たらとてもレベルが違いこれは無理、と思っていた。

今年の夏は、「小学校が6年あったように中学・高校も6年ある。合宿にも少しずつ慣れていけば良い。はじめはお母さんと一緒に参加できるところから参加してみませんか」と言っていた。こうして、まだエルム在籍生の親が足を踏み入れたことのない親禁制のエルムの合宿に参加することになった。

真剣さが伝わる教員劇

私たちが参加したのは、8月11日から13日。到着日の夜は教員劇。戦時中に、教え子を戦地に送った教師、人殺しを最後まで拒み死んでいった子どもたち、親、それぞれの苦悩と普通の人々が戦争に巻き込まれて



夏合宿では毎年子どもたちがスローガンを考えます。どんな合宿に、どんな自分になりたいのかという想いが込められています。



中学部立会系列オリジナル劇「勇気の証明」のワンシーン。食品偽装問題を題材にしました。

いく様子が本当に短い時間に伝わってきた。かなりの熱演で、劇団員かと思うほどだった。大人も中途半端じゃない。真剣に子どもたちと向き合っているというのがひしひしと伝わってきた。

真剣、熱気 そして感動の平和劇

翌日は子どもたちの平和劇本番。朝から、部屋と言わず廊下でまで練習をしていて、その場を通るのも申し訳ないというほど真剣に取り組んでいる。それ

でも、気づくと「通っていいですよ」と礼儀正しく通してくれ、すぐまた再開している。集中力が途切れてない！すごい！
夜の本番は、高校生が近未来をイメージしての環境問題、中学生が白旗を掲げた兵士という戦争の問題、ミートホープ社事件を題材としての食品偽装の問題を取り上げた。内容も何度も何度も手直したのだろう。もし、自分がその場にいたらどうするか？そのときの周囲の反応は？時代は？おかれている立場は？と一面的でなく、いろいろな方向から考えられている、大人でも考えさせられるものだった。演技者も、セリフだけでなく、感情が入っている。合宿前から練習していたのだろうか？一つのことを仲間ですぐに

ときの連帯感や達成感、感動が見ている側にも伝わってきた。真剣さと熱気と感動のなか、平和劇が終わった。見ているほうも、気が引き締まり軽い疲れを覚えた。

次代のエルムを支える 高校3年生の決意

高校3年生は、食堂の隅でいつも大学受験に向けて勉強をしていた。合宿で、皆わいわいしているのに、かわいそうだなあと思っていた。その高校3年生が最後の夜のパーティーで、自分たちの思いを後輩に伝えた。

「今まで、エルムに来ないときもあつたし、仲間を信じられないうちもあつた。しかし、いつもエルムが支えになっていた。エルムの生徒として合宿に参加できるのは今度こそ最後」

「立派な大人になることがエルムに込めること。今度はエルムを支える側になりたい」と決意をのべた。あと半年でエルムを卒業しなければならぬことに戸惑いながらも、これからの生き方を真剣に考えたのだろう。その一人は小池先生のご息



高校3年生たちのメッセージは、毎年後輩たちに大きな感動を与えます。

だった。私は涙が止まらなかつた。小池先生が大事にしてきたエルムが脈々とつながっていると思つた。そして、これからも後輩たちが続いていくことだろう。高校3年生で合宿に参加し、勉強ばかりしているように見えても合宿参加の意義はとつても大きいと感じた。

明日香のおかげで

私が参加したのは合宿後半の数日間だったが、密度が濃いと感じた。教員に聞くと、「それが合宿だ」と言われた。教員は睡眠時間がわずかで疲労もピークであつたらうが、子どもの前で疲れた顔ひとつしてないから。矢沢先生は「私に怒られるから」とうそぶいたが、教員集団の自発的な意思統一があるの

だろうと感じた。

子どもたちを合宿に送り出す保護者は、子どもたちが本当に成長しているのかと疑問や心配に思うことがあるかもしれない。けれど、私が目の当たりに見た子どもたちは、親の前ではきつと見せないけれど（家ではダラダラしていて想像つかないかもしれないが）、本当に集中して一生懸命にやっていた。どんなに自分が大変でも他人への気遣いを忘れず、すぐく大人だなど感じた。合宿に参加した子どもたちは、集団の中ですぐ成長しているんだと、本当に実感した。だから、保護者のみなさんには心配しなくていいですよ、と伝えたい。

個人的には、この合宿参加は身体的にも精神的にもかなりきついものだった。それでも、「この体験は貴重だった」とふっきれた。明日香にとっては、はじめの一步。私にとっては、親禁制のエルムの生の教育を目の当たりにすることができた。エネルギーも少し分けてもらった気分だ。「明日香のせい」から「明日香のおかげ」。

教育サポートセンター NIRE 活動掲示板

7/16 一日キャンプ体験(デイキャンプ)



14名の参加で、大井ふ頭野外活動広場にて、夏のキャンプに向けた飯ごう炊飯の練習を行ないました。子どもたちは、グループに分かれて飯ごうを使ってご飯を炊き、おかず作り（ゆで卵、ゆでジャガイモなど）にもチャレンジしました。薪を使ってカマドでご飯をたく経験は初めての子がほとんどでしたが、子どもたち同士協力し合いながら、おいしい昼食をつくることができました。保護者も多数参加していただき、おいしい豚汁をつくってくれました。午後は広場で水遊びや綱引きなどのレクリエーションで思いっきり遊び、充実した一日となりました。

7/20 特別支援教育公開セミナー



「スクールカウンセラーのじょうずな使い方」というテーマで、大田区のスクールカウンセラーで臨床心理士の廣瀬信慶さんをお招きして、まだまだ馴染みの薄い「スクールカウンセラーの活用法」についてお話を伺いました。(参加者 30名)

参加者の感想

スクールカウンセラーの学校での様子や役割などが理解でき、特別教育支援について勉強している私にとって、とても参考になりました。(大学生)

具体的な例もあってわかりやすかったです。スクールカウンセラーというと、今まで敷居が高くて近よりがたかったですが、一度行ってみようと思いました。(保護者)

8/24
～27 夏のキャンプ2007



昨年の2倍の参加者となる11名で行なわれた夏のキャンプ。今年は天候に恵まれ、すべてのプログラムを予定通り進めることができました。マ스つかみ、川遊び、食事づくり、ハイキング、ローラーすべり台、キャンプファイヤーなど、盛りだくさんの企画を通して、たくさんの思い出とかけがいのない仲間と出会うことができました。保護者からも、「ひと回り大きくなって帰ってきた気がする」とうれしい感想が寄せられました。「次は春のスキー教室(アズスキー)で会おう!」と早くも次の企画に、子どもたちは胸を躍らせています。

9/24 猿島ハイキング



6月に雨で上陸できなかった猿島に再チャレンジ。14名の参加で、横須賀沖に浮かぶ東京湾唯一の無人島「猿島」を散策しました。風が強いこともあり、船は大きくゆれて、ちょっぴり怖かったけれど、仲間を励ましあいながら上陸。その後は2チームに分かれて、協力しあいながら各ポイントの課題をクリアして行きました。

キャンプに参加できなかった子も、最初は緊張していましたが、しだいに慣れてみんな仲良しになりました。NIREの仲間の輪がまた一つ大きくなった取り組みでした。